

第1回 精神に障がいのある親とその子どもの支援に関する学習会 報告

2015.5.17

平成 27 年 5 月 10 日、日本福祉大学名古屋キャンパスにて、昨年 5 月に実施した支援者間の「情報交換会」を発展させる形で、「精神に障がいのある親とその子どもの支援に関する学習会」を開催しました。これは、親&子どものサポートを考える会の主催による 1 つのテーマを元に参加者で支援を検討するという学習会です。

第 1 回の参加者は 45 名（スタッフを含む）で、参加地域も、北海道 2 名、東北 1 名、関東 6 名、中部 11 名、三重を除く関西 6 名、中国 5 名、九州・沖縄 1 名、三重 13 名と、全国各地からテーマに関心のある方にお集まりいただきました。

当日は、三重で実施している語りの場に焦点を当て、『親&子どものサポートを考える会の取り組みと“語りの場”の実践から見えてきたこと ～語りの場の持つ力と限界～』をテーマに土田より話題提供し、約 50 分の意見交換を行いました。その後、参加者がお茶を飲みながら交流するティータイムの時間（45 分間）を設け、参加者からの情報発信（取り組みの紹介等）をしていただきました。最後に、今後の学習会開催について参加者から意見・意向を伺いました。

以下に学習会でのやり取りを紹介します。

1. 話題提供

テーマ：『親&子どものサポートを考える会の取り組みと“語りの場”の実践から見えてきたこと～語りの場の持つ力と限界～』 ⇒パワーポイント資料参照

発表者：親&子どものサポートを考える会 土田



2. 意見交換

1) 会の設立に対して、反対はなかったか？ こうしたらうまくいくという点があれば

土田：反対意見はなかった。設立について誰かに相談したわけではなく、自分たちで会を設立し働きかけていった。看護師と医師の 5 人で行っていたが、他職種の協力がなると行き届かなくなってきたため、会の保健師にこのテーマに関心を持つ他職種に繋いでもらい、結果的に現在のメンバーになった。

2) イベントを開催した後、参加者に個別のフォローを行っているのか？

土田：特に行っていない。通常の集いの中で、前半は語り、後半にイベントという形で行っている。語りの場を求めて集いに参加される方もいるので、固定化した開催場所を離れることができない。イベントがメインではないのでフォローはしていない。

3) 集いのニーズを事前にどのように把握していったのか？

土田：個別にお話を伺う中で、他の人の話を聞いてみたいと言われた方を集めてサポートグループを行った。その時の参加者の反応から集いのニーズを感じた。

子どもの方と出会うために、子どもの立場で語る講演会を企画したり、会のホームページを通じて状況を聞かせてくれる方を募集していった。子どもが語る場がそれまでなかったので、思いを話しフォローもしてくれるなら…と協力してくれる方は多かった。

司会：集い参加者の延べ人数は 330 人だったが、実人数はどのぐらいか？ホームページ閲覧者はどのぐらいか？

土田：継続して集いに参加している方もいるので、実人数は40～50人ぐらいだと思う。ホームページは2010年12月末に開設し、2015年2月に50000件に到達した。月平均1000件のアクセス。

4) 子どもの方に精神疾患のある方はいるか？

土田：集い参加者にも、不調を訴えてクリニックに受診している方はいるが、集いに来る＝自分の力で来所できる人なので、日常生活は適応できている。そういう意味で健康度は高い。そうした情報は、訪問等で親子を支援しているの方が持っているのでは？

訪問支援者：アウトリーチのケースで子育てをしている親御さんが多いので研究会を始めてい

る。20歳未満の子どもを持つ20事例を取り上げて調べたところ、子どもも障害を持っているケースは多かった印象がある。精神疾患だけではなく、知的障害、学校に行きにくい子ども、施設入所している子どもの割合が多いと感じた。

地域の状況1：親の支援者の立場に立つと、何重にも重なる生活のしづらさを把握できないままスルーしてしまうことが多い。アウトリーチする必要性を感じる。親子という視点で支援することが大事だと思う。

地域の状況2：訪問すると、本人の生活の苦労、一緒に住んでいる家族の苦労が見えてくることがある。日本のサービスは、来所から始まる場所が多いため、その裏側にある見えにくいところだと思う。

5) 子どもが親の世話をしているケースを見ることがある。行政として十分関われないという思いがあるが、行政との連携している点があれば教えてほしい

土田：現状では行政との連携はほとんどできていない。活動を広報してくれているが、一緒に何かをやることはまだできていない。活動を始めて4年ほど経過して、ようやく「こんな人がいるよ」と声をかけてもらえるようになった。子どもの頃から安心できる人との関係を作っておくことが大事と思っているので、保健師や訪問看護師の役割は大事だと思っている。

行政経験者：活動を知ってもらうように働きかけていた。自殺対策など行政の事業とタイアップして活動をサポートしたり、行政が出す事業計画の冊子に取り上げて取り組みを紹介している。



支援機関の現状 1：就学前の子どもの場合、児童福祉と精神福祉、学童期になると教育機関と精神保健福祉と児童福祉という風に、行政の縦割りの仕組みの中で押しつけあっている現状があるように思う。

支援機関の現状 2：関係機関はそれぞれ一生懸命に奮闘しているのに、その熱意がかみ合わず連携がうまく行かなかったり対立してしまったりすると、本当にもったいない。だからこそ、支援を必要とする子どもの情報共有と連携を図る市町村の「要保護児童対策協議会」がマネジメント機能を実質的に発揮する必要がある。児童養護施設等への調査結果では、入所児童の親の半数ほどにメンタルヘルス問題がみられ、入所児童の 4 人に 1 人に障害（半々ぐらいの割合で発達障害・知的障害）があると認識されていた。児童福祉はこの実態に応じた支援体制整備や精神保健医療福祉との連携が不可欠だ。なお、訪問看護ステーションや重度のメンタルヘルス問題のある人への多職種連携による訪問型の地域生活支援である ACT（アクト）へのヒアリング調査を通じて、これらが子育て世帯にも非常に有効な機能を発揮していること、児童福祉行政も親・子に支援が必要なケースを精神保健福祉機関に紹介していることが分かった。ある ACT で伺った話では、お母さんに訪問を拒絶されていたので、しばらくは訪問するたびにその家の子どもとキャッチボールをして過ごしたという。子どもが落ち着いてきたことで母親も心を開き、会ってくれるようになり服薬も再開できたという。訪問看護ステーションでは、遠足のお弁当づくりが苦になるお母さんのために、早朝に訪問したスタッフがお母さんと一緒にお弁当を作って子どもに持たせたという話も聞いた。メンタルヘルス問題のある親とその子どもに対する生活支援は、そのまま虐待予防でもある。このような、生活ニーズに沿った、領域や枠組みを超えた柔軟な支援の必要性を感じた。

支援に関する意見：1つの領域ではカバーできないが、縦割りになっていると紹介するところがない。アクトのような多職種訪問チームに紹介すればどうにかしてもらえるとということになると、他機関は紹介するだけの役割になってしまう。そうになると地域全体の力はあがっていかないという問題がある。

他国の現状 1：イギリス バーミンガムでは、自分の親が精神疾患だった人が子どもの立場をサポートする役割を担っていた。そうしたシステムが機能し、ボランティアの 3 分の 1 は子どもの立場の人で運営されている。

土田：子どもの立場の方から、自分たちも集いをやりたいという声をもらうことがある。しかし、支えきれなくなった場合に大変だと思うので、「何か会った時に相談できるように、まず支援者とつながってください」と伝えている。

支援に関する意見 2：ニーズを把握してから始めようとするのが大変だが、やり始めるといろんな人たちが集まってくる。やり始める方がニーズが掘り起こされてくる気がする。

他国の現状 2：アクト発祥地（ウィスコンシン州マディソン市）で包括的地域支援システムを見学した。アメリカでは親子分離の基準が明確な一方、親子のためのさまざまな支援プログラムもあった。なかでも、両親が離婚した子どもや、親が精神疾患の子どものグループを学校とクリニックのセラピストが共同で運営

できることは、孤立から救う意味でラッキーな活動だと言っていた。このような学校との連携に、集いの会の方々がピアのように入るなど、集いの活動を学校に還元していくとよいと思う。

親への支援に関する意見3：アウトリーチはアクトの一部で、病院か地域かではないクラブハウス、就労支援、リハビリハウスなどの多様なサービスで成り立っていると知った。自分のことをしっかり語れないのは、親も同じ。親自身が自分の苦勞を語れるような支援も必要。妊娠時からのサポートが必要だと思う。

土田：親の語りについて意見を聞きたい。

支援の実例1：親・子のグループワークをしているが、これから、「子離れ世代の親」を集めてグループを始めようと考えている。訪問で家族を眺めると発達障がいの子どもの多く、SOSを発信することもできていない。中学、高校と所属先（管轄）が変わると支援者が切れてしまう。SOSがうまく出せなくて注目を引く行動を取る子どももいる。それで、相談する人がいないという現状に気づいた。子どもは、「私が親を何とかしなくちゃ」とう責任感が強い。最近、子どもから親子関係の具体的な相談が増えてきた。発言者の所属機関が中心に行うのは親支援なので、親にアクセスし、子離れのところをやってみようと考えている。

支援の実例2：要保護児童対策協議会での活動に参加している。大きな単位の行政からは動きにくい。中学生の子どもが親に代わって学校を休んで保育園の姉弟の世話していることもある。要保護児童対策協議会の個別ケース等、中学校区くらいの小規模なところから動かしていく。担任の先生などを理解者として引き込むと、進学の時なども途切れない支援に繋がりやすい。対立的な雰囲気になりそうな時も、「みなさん、すごい熱心ですよ。このエネルギー、子どもの支援に向けていきましょう」と声をかけてみるだけでも、動きが変わってくる。

3. 情報発信（活動紹介）

(1) 精神障がい者の親に育てられた子のコミュニティ

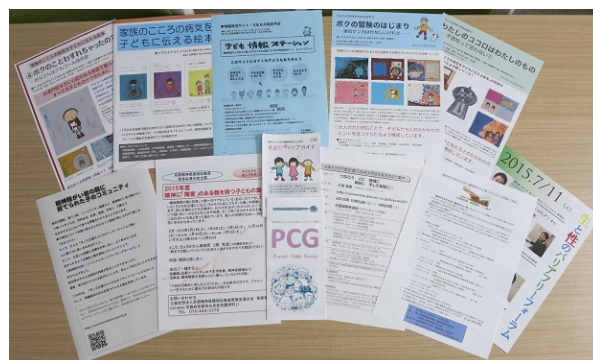
親が精神障害という人のクローズドの SNS をやっている。子どもの思いや解決方法を共有して見出せる場にしたい。SNS だけでなく、メンバーでオフ会をしたりもしている。

(2) 県立広島大学 松宮先生

要保護児童対策協議会スタッフの研修会を各地で実施している。「メンタルヘルス問題のある親による子ども養育世帯への支援」がテーマ。認識共有と連携づくりを目的とした研修プログラムを試行してその評価アンケートに回答してもらう。児童福祉と精神保健福祉の連携に関する各種専門職団体の研修も同様に実施している。講師料・交通費等不要で、研究費がある間は全国どこへでも行くので声をかけてください。

(3) プルスアルハ

絵本の紹介。コミュニケーションのきっかけのツールとして使ってもらいたい。絵本を通じて多様なニーズが寄せられた。ウェブを通して発信すると、絵本の対象以外の人にも情報



が届けられるのではないかと思い、作成したいと考えている。

(4) 名古屋市指定障害福祉サービス事業所 ビューズ@名駅

離職中および休職中の方の社会復帰支援（復職、再就職等）を行うセンターで、セルフモニタリングやマインドフルネスなどのグループを提供している。説明会やパートナー茶話会も開催している。また社会復帰支援とは別の活動として、分野や職種を超え、地域で支援者の立場である方々と事例検討や勉強会を行っている。お互いに自分ができることをシェアしあい、お互いに支え合えるネットワークを築きたい。

(5) カンガルーの会

支援者側がきちんと支援できているかチェックするチェックシートを作成中。必要な方に使ってもらいたいと考えている。

(6) デイケア学会が 10 月 23 日～大阪で開かれる。夏刈先生の市民公開講座も予定している。

(7) 立正大学 森田先生

ケアラー連盟でヤングケアラーの調査をしている。学校の先生を対象にした調査の結果をケアラー連盟のホームページで公開予定。

4. 今後の学習会開催についての意向

参加者よりテーマ、開催場所、開催頻度、今後の連絡方法などについて意見を出してもらい、意向を伺ったところ、今後のテーマに関しては、「実際の地域での親子の生活状況や支援」「アクトでの対応状況」「医療へのつなげ方とその後のフォロー」を希望する声が多かった。いただいた意見を元に、次回開催について検討していきたい。

5. まとめ

精神に障がいのある親とその子どもの支援に関心を寄せる者が集まり、交流し意見を交し合う貴重な時間となった。精神に障がいのある親とその子どもへの支援（特に子どもへの支援）は、現行の支援体制・制度では支援の対象にならないことが多く、支援しようと奮闘する者も行き詰まりを感じることもある。職種や立場、地域は異なるけれども、“精神に障がいのある親とその子どもへの支援”という同じ志を持った者が集まり、意見交換・情報交換できたことは、「奮闘している仲間がいるから私も頑張ろう」とエネルギーをもらえた気がする。やり取りの中で気づいた「こうやればうまく行くかも…」というヒントやここで出た課題をそれぞれが持ち帰り、また議論する学習会へと発展していければ…と願っている。やり取りの中で、障がいを持つ親の子どもに何らかの障がいはあるのか？との質問があったが、“障がいを持つ親の子どもだから障がい”という直線的な捉え方にならないような伝え方をしていくとともに、子どもの育つ環境を整え、親・子が支援を求めやすい環境となるように、自分に何ができるのか？と考えながら取り組んでいきたい。

文責：土田